

〔学術論文〕

『ボヴァリー夫人』をめぐる比較文学的一考察
—翻案小説『医師の妻』を通して—

野田(水町) いおり

[abstract] This paper tries to discuss Gustave Flaubert's *Madame Bovary* by comparison with Mary Elizabeth Braddon's *The Doctor's Wife* which has been identified as rewriting of *Madame Bovary*. *The Doctor's Wife* is a 'sensation' novel and it was first published in 1864 in England. In *Madame Bovary*, the theme which fantasy not always being reality is carried throughout the novel. Emma preferred the romantic world to the real world. Since she was a child, she had longed for the romantic life she had dreamed by reading. Like Emma, Braddon's heroine, Isabel Gilbert, is fond of reading books and trapped in a married life with an ordinary provincial doctor who can not understand her hope for an imaginative life. But Braddon's novel is quite different from Flaubert's in terms of adultery. Emma found her life dull and unfulfilling and was constantly trying to change the reality, which eventually lead Emma to commit suicide. But Isabel did not pursuit her happiness in the real world. In spite of the similarity, that is reading romantic novels affects both heroines' romantic characters, adultery and sexuality never provoked Isabel. What, then, makes them so different? In fact, *The Doctor's Wife* does not have the literary value compared with Flaubert's masterpiece. However, the fact that these similar substructures developed into quite different stories shows the wide range of difference between two country's social background, cultures and author's attitude toward their works.

キーワード：比較文学、『ボヴァリー夫人』、*The Doctor's Wife*、読書、女性読者

はじめに

本論文では、リアリズム文学を代表する作家ギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』¹とその翻案小説であるメアリー・エリザベス・ブラッドン²の『医師の妻』³を取り上げ、社会背景に着目しながら、両者の比較を試みる。

¹ Gustave Flaubert (1821-1880) 以後、フロベールと記載する。本文にて使用したテキストは Gustave Flaubert *Madame Bovary* Bookking international, Paris, 1993 である。

² Mary Elizabeth Braddon (1835-1915) 以後、ブラッドンと記載する。本文にて使用したテキストは Mary Elizabeth Braddon *The Doctors Wife*, edition by Lyn Pykett, Oxford, 1988. である。

³ 原題 *The Doctor's Wife* (1864年出版) 以後、『医師の妻』と記載する。

『ボヴァリー夫人』は、ロマンティックな甘い感傷と夢のような結婚生活に憧れて田舎医者シャルルと結婚するものの、すぐに現実生活の単調さと夫の凡庸さに幻滅した主人公エンマが、満たされない感情に身を焼かれ、ただひたすらに夢を追って不倫、借金、服毒自殺という破滅の道へと身を投じる様を描いた、19世紀のフランス文学を代表する傑作である。一方、『医師の妻』は『ボヴァリー夫人』が出版された7年後の1864年にイギリスで出版された。結末こそ異なるが、主人公のイザベルが、幼少期に小説を多読したこと、田舎の医者と結婚したこと、結婚生活に幻滅し、夫以外の男に恋をする点でストーリーは類似している。ブラッドンが『ボヴァリー夫人』を読み、それに着想を得て『医師の妻』を書いたのかどうかについての客観的資料は残っていない。しかし『医師の妻』が『ボヴァリー夫人』の翻案小説であることは、ブラッドンがフランスの作家たちの作品を多読していたこと、出版年、両作品の共通点の多さなどからも明白であり、ブラッドンの研究では第一人者とも称されるマルレーヌ・トロンプ (Marlene Tromp) が、論文「危険な女」の中で、次のように述べている通りである。

The Doctor's Wife is Mary Elizabeth Braddon's rewriting of Flaubert's *Madame Bovary* in which she explores her heroine's sense of entrapment and alienation in middle-class provincial life married to a good natured but bovine husband who seems incapable of understanding his wife's imaginative life and feelings.⁴

もちろん『ボヴァリー夫人』と『医師の妻』が並べて論じられる対象でないことは、作品の文学的価値、作家のレベルから見ても明らかである。フロベールが芸術至上主義を貫き、何年もの歳月をかけて作品を完成したのに対し、貸本屋の女王とも言われるブラッドンは、大衆小説作家であり、多作で、自らも雑誌の編集長を務め、文学的というよりむしろ、経済的に成功した作家である。しかし、読書以外の娯楽がほとんどない時代の中産階級の女性たちにとって、読書は女性たちの道徳観に作用し、社会規範を逸脱させる危険な要素を含んでいた。エンマのように本を読みふけることで道を踏み外した女性が描かれた一方で、同じように大量に本を読み、道を踏み外しかけたものの、一歩手前で踏みとどまり、社会規範から逸脱しない女性がイギリスで描かれたことは興味深い。その違いはどこに起因するのか。本論文において、『ボヴァリー夫人』と『医師の妻』を比較し、当時の社会背景や「読書する女性たち」といった新たな視点を加えることによって、文学作品としてだけでなく、19世紀の社会を映し出した歴史的資料の一つとして、『ボヴァリー夫人』の新たな読み方が出来るだろう。

比較文学研究者は、エンマとトルストイのアンナカレーニナ、イブセンの『人形の家』のノラなどを比較し、家父長制を背景とした社会規範の中で、女性が自らの意思で生きることを、葛藤

⁴ Marlene Tromp "The Dangerous Woman" in *Beyond Sensation*, State University of New York Press, 1999.

しながら選択するというテーマにおいて共通点を指摘している。しかし、比較文学研究における翻案小説分野に関して言えば、現在まで研究は進んでおらず、特にイギリスに『ボヴァリー夫人』の翻案小説が存在したことは、日本はおろかフランス、またイギリス本国でもほとんど知られていない。『ボヴァリー夫人』の翻案小説の比較研究は数少ないが、日本では1993年に北條文緒が「イギリスのボヴァリー夫人」という論文を発表している。⁵ その中で、北條は両作品における読書の重要性を強調し、エンマの持つ「読書、欲望、行動の一体化」がイザベルに欠けていることを指摘しているが、主人公の読書が小説の中でどのように取り上げられ、ストーリーの展開にどのように影響したのかについてのテキストの比較が十分とは言えない。

そこで、本論文では、2つの小説の結末が大きく異なった理由を、両作品における閉鎖的空間のイメージの相違、主人公の読書の役割の違いに求め、さらにイギリスとフランスの文化的背景にも言及しながらテキストを考察することにする。第1章では、2人の主人公に共通した人生の閉塞感をメタフォリックに描いた閉鎖的空間のイメージが、読書と関連した中で、ストーリーの展開にどのように作用するのかを論じる。第2章は、エンマとイザベルの読書の役割の違いを見出すことを目的としている。この2つの小説において、読書はきわめて重要なファクターである。本論文で主人公たちの読書の役割の違いを明確に示すことが出来れば、これらの小説における読書の重要性がいっそう深まるものと考えている。第3章では、イギリスとフランスの文化的背景、特に貸本屋と女性読者も考察に加え、閉鎖的空間や読書の役割の違いから生じた主人公たちの行動の相違を分析する。リアリズム文学は、近代市民社会を形成するブルジョアと、ブルジョア社会における現実の直視、さらには科学的実証主義による緻密な分析のもとに描き出されている。それゆえ、リアリズム文学の傑作と言われる『ボヴァリー夫人』とその翻案小説である『医師の妻』の考察の材料に、文化的背景を用いて論じることは、意義あることだと考えている。

第1章 閉鎖的空間のイメージ

エンマもイザベルも結婚生活や平凡な日常に閉塞感と息苦しさを感ずき、鬱積とした感情を抱きながら暮らしている。2人にとって、読書は現実から目をそむけ、非日常を作り出す重要な媒体である。その際、人生の閉塞感をメタフォリックに描いた閉鎖的空間と読書は密接に結びつき、ストーリーの展開に大きな影響を与えている。本論文では、閉鎖的空間を「外界との接点が遮断されている様態」と定義し、閉鎖的空間のイメージが2人の主人公に対し、どのように作用し、その結果、物語の展開にどのような影響をもたらしたのかを見ていくことにする。

『ボヴァリー夫人』における閉鎖された空間を象徴的に表しているのはエンマが少女時代を過ごした「修道院」と「乗合馬車」である。バルザックは「禁断の格子窓が想像力をかき立てる」⁶

⁵ 北條文緒「イギリスのボヴァリー夫人」東京女子大学『紀要』、1993年。

⁶ バルザック著 安土正夫・古田幸男訳 バルザック全集2『結婚の生理学』、東京創元社、1973年。

と『結婚の生理学』の中で述べているが、エンマの過剰ともいえる想像力とロマンティックなものへの憧れは、空間が閉鎖的になると比例するように強まっている。修道院という外界との接点を遮断された閉鎖的な空間にいながらにして、そこから脱出する手段は、自分の部屋に逃れ、そこで想像の世界に閉じこもることである。エンマは寝室で隠れてロマンティックな小説やキープセイク（挿絵入りの絵本）を読んだ。エンマにとって、読書は夢の世界への入り口であり、その夢は修道院の寝室のベッドの中で大きく膨らんでいった。ところが、「物が近くになればあるほどエンマの考えはそれから遠ざかっていった。一方で、彼方には幸福と情熱の広々とした世界が、果てしなく広がっている」⁷という『ボヴァリー夫人』の一節が示す通り、エンマの想像力は、読書によって肥大するが、今やエンマの興味は目の前の本ではなく、外の世界に向いている。北條が「読書、欲望、行動の一体化」と指摘したように、閉鎖的空間で培われたエンマの想像力は、現実の世界で飛躍し、生活の一部になることを望む。エンマはシャルルにバラの花びらをちぎって投げたり、庭に出て月の光の下で情熱的な詩句を朗読したり、物憂げにため息をつきながら憂鬱なアダージョを歌って聞かせたりしたが、凡ような田舎医者シャルルは全く理解できない。愛人のロドルフのために自分の髪を切ったり、夕暮れの鐘や大自然の声について語ったりしたが、ロドルフはそれをうるさくさえ感じてしまう。閉鎖的空間で養われた想像力は、現実の世界ではまるで無力である。

また、「つばめ」という名の乗合馬車も閉鎖的空間を生み出すものの一つである。つばめは、車輪が幌の高さまできているので、乗客は窓の外をほとんど眺めることが出来ない。また、馬車についた小さな窓は、馬車の内部と外界をつなぐ唯一の接点であるが、積もった塵と泥の斑点で汚れて視界を遮っている。エンマが愛人ロドルフに駆け落ちを持ちかけ、町を去る時に使おうとしたのは、他ならぬ、このつばめであった。この場合、エンマにとって、つばめという閉鎖的空間は、読書により養われた夢を具現化し、醜悪な現実から逃れるためのツールとなる。エンマとロドルフを乗せて馬車は走り去るはずであったが、ロドルフは待ち合わせの場所に来なかった。この閉鎖的空間に託されたエンマの夢と想像したロマンティックな世界は、またも現実の世界では無力である。また、2人目の愛人レオンに会いに行く時にもつばめは登場する。エンマはつばめの中で、かつて読んだ小説の主人公に自分をなぞらえ、ロマンティックな夢に浸り、レオンに会う喜びをかみしめる。狭いつばめの中で、エンマは想像力をはちきれんばかりに肥大させ、飛躍させている。

⁷ Plus les choses, d'ailleurs, étaient voisines, plus sa pensée s'en détournait, tandis qu'au-delà s'étendait à perte de vue l'immense pays des félicités et des passions.(p. 70.)

Son amour s'agrandissait devant l'espace, et s'emplissait de tumulte aux bourdonnements vagues qui montaient. Elle le reversait au dehors, sur les places, sur les promenades, sur les rues, et la vieille cité normande s'étalait à ses yeux comme une capitale démesurée, comme une Babylone où elle entraînait.⁸ (p. 271.)

しかし、実際にレオンを前にすると、レオンの姿はエンマの想像の喜びの妨げとなり、幻滅をもたらした。逢引を重ねるたびに情熱は薄らぎ、それを埋めようとエンマはいっそう激しく情熱を燃やそうとした。しかし、その後に残るのは大きな不満と嫌気と落胆であり、やがてそれは悲しみに変わっていったのである。修道院の小部屋よりも小さな乗合馬車の中で、エンマの抱く恋のイメージは現実の姿を超過して膨らんでいる。閉鎖的空間の中で大きくなりすぎた想像力は、現実の世界では悲しいほど無力であった。

閉鎖的空間は「修道院」や「乗合馬車」などの物理的なものだけにとどまらない。エンマの場合、思い出に耽ったり、考え事をしたりして、思考が精神の内面に向かい、その結果、外部との関係を絶つような、精神の閉鎖を描いた様子がテキストの中に少なからず登場する。以下には、まさにシャルルを目の前にして、エンマの精神が外界と遮断され、別のことに思いを巡らす姿が描かれている。

Et, dès qu'elle fut débarrassée de Charles, elle monta s'enfermer dans sa chambre. D'abord, ce fut comme un étourdissement ; ... Elle se répétait : " J'ai un amant ! un amant ! " ⁹ (pp. 172-173.)

Emma ne dormait pas, elle faisait semblant d'être endormie ; et, tandis qu'il s'assoupissait à ses côtés, elle se réveillait en d'autres rêves. ¹⁰ (p. 205.)

Charles pensait à son père, et il s'étonnait de sentir tant d'affection pour cet homme qu'il avait cru jusqu'alors n'aimer que très médiocrement. Madame Bovary mère pensait à son mari. Les pires jours d'autrefois lui réapparaissaient enviables. ... Emma pensait qu'il y avait quarante-huit heures à peine, ils étaient ensemble, loin du monde, tout en ivresse, et n'ayant pas assez d'yeux pour se contempler. ¹¹ (p. 261.)

⁸ (引用訳) エンマの愛情は広い空間を前にして大きく広がり、上がってくる低いうなりのざわめきでいっぱいになった。エンマはその愛情を外へ、広場へ、散歩道へ、街へと注ぎ返した。ノルマンディーの古都は目の前にひらけ、まるで常軌を逸するほどの広い都へ、バビロンの都へと入っていくような気持ちさえた。

⁹ (引用訳) シャルルを追い払うと、エンマはすぐ二階へあがって部屋に閉じこもった。最初はまるでめまいでもするような気持ちだった。(中略) エンマは繰り返した。「私には恋人がいる！恋人が！」

¹⁰ (引用訳) エンマは眠っていなかった。眠ったように見せかけていただけであった。シャルルがエンマのそばでまどろむ間、エンマは別の夢を見るのであった。

¹¹ (引用訳) シャルルは父親のことを考えていた。今まではそれほど好きでもない人だったのに、多くの愛情を感じることに驚いた。ボヴァリー老夫人は夫のことを考えていた。一番不幸に思えたかつての日々が懐かしく思い出された。(中略) エンマはつい48時間前、自分たちが世俗を離れ、陶醉したこと、飽きることもなく眺めあったことを考えていた。

上記の引用で示したとおり、エンマの精神が外界との接触を絶った時、現実とは違うことを思い描いている。目の前にいるシャルルが現実であるならば、ロドルフやかつて小説で読んだユートピアはまさに非現実である。「私には恋人がいる！」と心の中で繰り返し、シャルルが隣で寝ている時に、小説で読んだようなロマンティックな世界を夢見る姿は、それをよく表している。また、義父の死をよそに、愛する恋人を思うのも同様である。シャルルとシャルルの母とエンマは、3人で川辺に腰かけ、3人とも過去のことを思い起こしているが、その内容はまったく異なっている。複数の人物が同一の空間を共有していても、個々の人物は他から切り離され、おのおの閉鎖的空間に身を置いているのである。下線で示したように、3者ともに *penser* の半過去を用いて、3人同時に過去を思っていることを示している。その中であって、エンマのみが追憶の対象さえも異なることは注目すべきである。

エンマの閉鎖的空間は物理的に閉鎖された空間、精神的に閉鎖された空間ともに想像力と結びついている。エンマは感性と想像力と情熱に重きを置き、自我と現実との相違により、いま・ここ (*ici*) を拒否して、よそ (*ailleurs*) を目指す逃避欲求を生じさせた。それは夢と思い出による内面探求であり、エンマが閉鎖的な空間で想像力を肥大させればさせるほど、その夢は現実世界で打ち砕かれていくようである。

次に、イザベルの閉鎖的空間について述べる。イザベルにとっての閉鎖的空間で特筆すべきは「書齋」「水車小屋」「引き出し」である。結論を先に述べると、イザベルの閉鎖的空間は、常に秘密と結びついている。物理的に閉鎖された空間であるローランドの家の書齋は、禁じられた読書を隠れて行う秘密の場所である。目をうばうほどの豪華な調度品と、たくさんの書物に飾られた書齋はひろびろとして美しい。家事もそっこのけで読書にふけるイザベルに痺れを切らし、夫ジョージの育ての親であり、召使でもあるジェフソン夫人は、イザベルに、これ以上本を読まないようにと進言する。pretty、automaton、childishなどの言葉で形容され、幼稚で受動的に描かれているイザベルは、表面上はおとなしくそれに従うが、実のところ、隠れてローランドの書齋に行っては読書に耽っている。書齋にいる間は、禁じられた読書を通じて、平凡な日常と自分自身を切り離し、夢のような小説の世界に没頭することが出来る。

また、水車小屋は恋するローランドと密会する場所である。金持ちで貴公子のような身なり、さらに書物に対し造詣の深いローランドと話をするため、イザベルはたびたび水車小屋を訪れ、読書の話に花を咲かせる。イザベルは、水車小屋という秘密の場所で、秘密の読書の話と、秘密の相手と行っているのである。自分の思いを胸の奥に閉じ込めて、退屈でつまらない日常生活を送っているイザベルにとって、書齋や水車小屋という閉鎖的空間は、秘密の「避難所」と言い換えることが出来るかもしれない。ここでは、イザベルの閉鎖的空間が、エンマのように想像力と結びついて現実化を望むのではないことを強調しておきたい。

さらに、机の引き出しという小さな閉鎖的空間も、イザベルの秘密と関係している。文書偽造

の詐欺を生業とする父親から送られてきた、刑務所からの出所を知らせる手紙は、けっして誰にも知られてはならない秘密のものである。イザベルは隠れて手紙を読んだ後、その手紙にしっかりと封をして引き出しの奥にしまい込み、けっしてその引き出しを開けることをしない。さらに父親の存在は、イザベルの精神的な閉鎖的空間にも作用している。誰にも言えない父親の秘密は、時としてイザベルの神経を高ぶらせ、ヒステリーを起こさせたりしている。

“Oh, don't have my name upon the envelope, George, she said; don't send my name to your friends; don't ever tell them what I was called before you married me” (p. 104.)

“No, no, George; don't send them, please. I really do dislike the name. Sleaford is such an ugly name, you know” (p. 104.)

結婚式の招待状に、自分の苗字を絶対に書いて欲しくないと感情的になって訴えるイザベルの意図がジョージには全く理解できないが、イザベルにとっては、同じ姓を持つ父の存在を恥ずかしく、醜悪なものと感じるその感情さえ、誰にも明かすことの出来ない秘密なのである。閉鎖的な空間が小さくなればなるほど、イザベルの秘密は重大で、けっして他に知られてはならない。

これまで見てきたように、エンマの閉鎖的空間は「想像力」と結びつき、イザベルの閉鎖的空間は「秘密」と結びついている。エンマは、閉鎖的空間で、読書により養われた想像力を過剰に膨らませ、イメージした夢の世界と外界との関わりを模索したり、落胆を味わったりしている。しかし、エンマの閉鎖的空間のイメージが、常に外に向かっていて事に注意せねばならない。エンマは、閉鎖的空間で膨らんだ想像を、現実の世界で具現化することを求めている。一方、イザベルの閉鎖的空間はエンマのそれとは全く異なり、秘密と結びついて、イメージは内側に向かい、外部との接触を拒んでいる。『ボヴァリー夫人』の筋書きが『医師の妻』と大きく異なった理由の1つは、両小説における閉鎖的空間のイメージの相違であると言えるだろう。

以上のように、テキストを読み解くと、2人の閉鎖的空間のイメージの違いの原因の1つに「読書」という共通項を見出すことが出来る。2人はどのような本を読み、その結果どうなったか。第2章では主人公の「読書の役割」について言及したい。

第2章 2人の「読書する女」－エンマとイザベル－

第2章では、エンマとイザベルに共通する読書傾向とロマンティックな嗜好について言及した上で、読書の役割がストーリーの展開にどのような影響を与え、どのようにクライマックスの相違をもたらしたのかを探っていきたい。

エンマは、平凡な日常生活と凡庸な夫に満足することができなかった。エンマが日常生活に適応できなかった原因は、彼女がロマンティックなものに対し、過剰とも言える憧れを抱いたこと

による。これにはエンマが少女時代に読んだ本が大きな影響を与えており、読書こそがヒロインであるエンマの夢想癖を形成し、虚構と現実の区別をあいまいにしたと言える。確かに、エンマにとって読書が非常に重要であることは間違いない。後に不倫相手となるレオンと初めて会った時、読書の話で意気投合して親しくなり、「実際、風が窓を打ちつけ、ランプが燃えている間、本を持って暖炉のそばにいる時以上に楽しい時間があるでしょうか」¹²と自分の読書好きについて語る場面は、顕著にそれを表している。

一方、イザベルも最初から多読の女として描かれている。彼女は、ジョージとの最初の出会いのシーンでも、膝に一冊の本を広げ、目の前のページに夢中になっていたのも、最初に二人の青年が近づいてきても目を上げなかったうえに、ジョージに話しかけられても、本の続きが気になるので、またすぐに読めるよう、本のページに親指をはさんだまま少し迷惑そうに、言葉少なに應對している。食事の時でさえ、本を離さず夢中で読みふける姿は、二人のヒロインに共通のものである。

また、二人の読書傾向は酷似している。両者とも幼少のころよりロマンティックな小説を読みふけり、すっかり夢想の世界にとり込まれている。エンマに関して言えば、少女時代に修道院でむさぼるように読んだ小説は、古城のロマンス、囚われた貴婦人、騎士道精神にあふれる殿方を題材にしたロマンティックなものであり、他にもシャトープリアン、ウジェーヌ・シュー、バルザック、ジョルジュ・サンド、ウォルター・スコット、これ以外にも貸本屋で借りた三文小説を大量によみふける。また、メアリー・スチュアート、ジャンヌダルク、エロイズなどの薄幸で悲劇的な生涯を送った女性たちに強い憧れを抱き、聖王ルイ、バイヤール、ルイ11世、ルイ16世などの歴史に名をはせた王や名将たちを思い、自分のまわりにこのような男性たちがいないことを恨めしく思ったりしている。

一方、イザベルに関しても、「他の人々が日曜新聞を読むのに対し、彼女は小説を読んだ。彼女は詩人や小説家たちが作り出した夢のような世界を信じていた」¹³とあるように、ロマンティックなものに対する憧れは非常に大きい。イザベルも貸本屋から借りた小説以外にバイロン、ディケンズ、ブルワー・リットン、シェリー、サッカレー、ブロンテ、ウォルター・スコットなどを読んだ。全体を通して、『医師の妻』の方が『ボヴァリー夫人』よりもはるかに小説や作家への言及が多い。テキストで取り上げられた作家や小説でイザベルの読書目録を作れば、それ自身が彼女の読書傾向と性質を表していると言っても過言ではない。さらに、イザベルも薄幸の女性に憧れる傾向があり、結核で早く死ぬことを望み、ナポレオン1世に強い憧れを抱いている。つまり、この2人の主人公に共通するのは、読書によりロマンティックな性格が形成され、夢想癖が

¹² quelle meilleure chose, en effet, que d'être le soir au coin du feu avec un livre, pendant que le vent bat les carreaux, que la lampe brûle ? (p. 96.)

¹³ She had read novels while other people perused Sunday papers...she believed in a phantasmal world created out of the pages of poets and romancers. (p. 218.)

生み出されたという点である。両者とも、読書で培われた想像力を用いて、過剰とも思えるロマンティックな世界を描き出し、それを結婚生活の中で見出そうとして失敗する。しかし、第一章で述べたように、エンマは自らの意思で現実の中で夢を追い求め、イザベルは小説の世界から抜け出すことをしない。

エンマは、結婚すると少女時代に修道院で読んだ胸が躍るような幸せな生活が待っていると信じていたが、実際の生活は平凡で、何のロマンスも与えてくれないため、小説で読んだような世界を、現実の生活の中で見出そうと努める。

Emma cherchait à savoir ce que l'on entendait au juste dans la vie par les mots de félicité, de passion et d'ivresse, qui lui avaient paru si beaux dans les livres. (p. 63)¹⁴

一方、イザベルもエンマと同様に想像した生活と現実の違いにショックを受け、新婚旅行から帰って来ると、自分が小説で読んで思い描いていた生活とあまりにも異なるので涙を流す。

'It is so miserable ! she sobbed ; it all seems so miserable !' (p. 112)

夢が破れ、悲しみに暮れる2人だが、イザベルはただ泣き伏し、エンマは不幸の原因を探ろうとしていことが上記の引用から読み取れる。幼少期の大量の読書、ロマンティックなものを好む読書傾向、そして読書により形成されたロマンティックな嗜好など、一読すると2人に共通のものであるが、本質的な意味で大いに異なっているのは、2人にとっての読書の役割が違っているからではないか。つまり、エンマにとっての読書は、想像力を養うものであり、また夢の世界を具現化するための「台本」である一方、イザベルにとっての読書は、満たされない現実の「避難所」としての役割を持つ。避難所にいる間だけは、悲しい現実から目をそむけ、日常生活と自分を切り離して夢の世界で生きることが出来る。イザベルが食事の用意や針仕事、その他一切の家事を投げ出して読書にふけたのは、平凡な日常から逃れるためだった。いったん避難所に入ってしまうと、イザベルは自発的に避難所から出ることをしない。読書という避難所の中で、イザベルはいつまでも秘密の夢に耽っている。エンマが姦通を犯し、イザベルはその手前で踏みとどまるが、それには読書の役割の違いが大きく影響していると言えるだろう。

さらに、エンマには、読書により養われた想像の世界を具現化しようとする主体性がある。エンマはロドルフとヨンヴィル郊外で乗馬を楽しみ、その後、迷いながらもとうとう不倫の関係を結ぶ。そして、帰宅したエンマはかつて読んだ本を思い出している。

¹⁴ (引用訳) そしてエンマは「至福」、「情熱」、「陶醉」といった、書物の中ではあれほど美しく思えた言葉が、人生では正確にはどんな意味を持つのかを知ろうと努めた。

Alors elle se rappela les héroïnes des livres qu'elle avait lus, et la légion lyrique de ces femmes adultères se mit à chanter dans sa mémoire avec des voix de soeurs qui la charmaient. Elle devenait elle-même comme une partie véritable de ces imaginations et réalisait la longue rêverie de sa jeunesse, en se considérant dans ce type d'amoureuse qu'elle avait tant envié.¹⁵ (p. 176)

自分がかつて読んだ本の、羨望した恋の女に見立てることで、エンマは子どもの頃修道院で読んだ小説の世界に立ち返り、青春時代の夢を具現化したのだ。

一方、一貫して幼稚に描かれているイザベルは、あくまで無垢な存在である。ローランドとの密会を続けても、それは自分の読書のために、愛人関係を望むものではない。小説の恋愛のように、プラトニックであり続けることを夢見ているので、夫を捨てて駆け落ちすることをローランドに求められて大いに驚き落胆する。

I have read of people, who by some fatality could never marry, loving each other, and being true to others for years and years...' (p. 223.)

一方、エンマは自分の意思で行動する女として描かれている。イザベルがローランドから駆け落ちを求められるのに対し、エンマは自ら「自分を連れて逃げて欲しい」とロドルフに持ちかける。

- Emmène-moi ! s'écria-t-elle. Enlève-moi... Oh ! je t'en supplie !

Et elle se précipita sur sa bouche, comme pour y saisir le consentement inattendu qui s'en exhalait dans un baiser.¹⁶ (p. 203.)

さらに、エンマは自らの意思で読書をやめている。「もう何もかも読みつくしてしまった」¹⁷とつぶやき、熱心に本を読むことをしなくなった。それは、イザベルのように夢の世界にとどまるのではなく、かつて自分が小説で読んだ夢の世界のイメージを、現実の生活の中で形にしようと努めている姿だ。そしてロドルフやレオンと不倫の関係を結び、結果として服毒自殺に追い込まれていく。読書を離れたエンマは、自らの意志で行動する女性として描かれている。結婚前、しつけのために両親に入れられた修道院の生活には飽きて途中で出てしまうが、結婚後は、こんなつまらない生活が続くなら修道院に戻りたいと願う。修道院のような閉鎖的な場所も、自らの意志で赴くのであればエンマは納得できると考える。運命に流されたように2人の男と恋仲に

¹⁵ (引用訳) その時、彼女は前に読んだ本の女主人公たちを思い出した。そういう姦通を犯す女たちの情緒的な一群が記憶の中でエンマ魅了する姉妹のような声で歌い始めた。エンマ自身もこういう想像の一部となってしまい、自分をあれほど羨望した恋の典型とみなし、若い時のいつもの夢を実現しているのだった。

¹⁶ (引用訳) 「わたしを連れて行って」エンマは叫んだ。「私を連れ去って。お願いだから。」彼女はこう言って男の口に飛びついた。接吻のうちにあらわにされる思いがけない承諾をとらえようとするかのよう。

¹⁷ J'ai tout lu, se disait-elle. (p. 74.) その後のエンマの読書は、バラバラとページをめくるか、読みさしてはやめ、次に移るというもので、かつてほどの熱心さが感じられない。

なるが、ロドルフに駆け落ちを切り出すのも、レオンといつ、どこで会うか決めるのもエンマである。借金を告白してシャルルに許しを請うこともできたが、エンマはそれだけは絶対に嫌だと考えた。結局、エンマは、自らの意志で死を選んだのだった。

エンマもイザベルも幼いころにロマンティックな小説を読み、結婚後は結婚生活に不満を持ち、現実逃避をする。その際、読書は非日常を紡ぎ出す重要なツールとなる。エンマの読書は、閉鎖的空間の中で想像力と結びつき、その想像は現実を超えて大きく膨らんでいる。エンマは小説のような夢の世界を現実求め、現実の生を選択する。この時、彼女の読書は夢の具現化のための「台本」となる。一方、バイロンを読み耽り、ナポレオン1世のようなヒーローにあこがれるイザベルは、ローランドの書齋で読書に耽り、水車小屋で本について語り合い、食事の時でさえ本を片時も手放さなかった。この時、イザベルは現実よりむしろ「避難所」としての小説の中で生きていると言えるのではないか。読書を「避難所」として扱うのか、夢の具現化のための「台本」とするか。ストーリーの違いは、ここから生まれたのである。

これまで見てきたように、エンマとイザベルの閉鎖的空間のイメージには大きな違いがある。それが2人の読書の役割に変化をもたらし、その結果、2人の行動に作用し、物語の展開の変化が生じた。第3章では、「貸本屋」と「女性読者」という文化的背景も考察に加え、閉鎖的空間や読書の役割の違いから生じた主人公たちの行動の相違を分析することにする。

第3章 本を読む女たちと危険な読書

ヨーロッパにおける産業革命以降の社会構造の変化は、人々に多くの影響を与えた。中でも余暇という概念の出現により、プライベートタイムの一般的な娯楽として、読書はとても大きな役割を担っている。それと同時に「女性は家の中にいて男性を支えるもの」といった道徳観が生まれ、中産階級の女性たちをより一層家庭に閉じこめることになった。その結果、娯楽といえば本を読むことしかない女性たちは、ひたすらロマンティックな小説を貸本屋から借りて読みふけた。そこで、第3章では、「貸本屋」と「女性読者」¹⁸という社会背景を考察の材料に、エンマとイザベルの行動の相違を論じていきたい。

エンマとイザベルが多くの共通点を持つのに対し、その他の登場人物たちは大いに異なっている。エンマのまわりに善良な人間はシャルルを除いて一人もおらず、そのシャルルの存在自体がエンマの苦しみの原因であるから、物語は最初から救いようのないものである。ところがイザベルのまわりには、彼女を育て、決して不道徳を犯さないように導いてくれる存在が、折にふれて登場する。例えば夫のジョージはいわゆる常識的な人である。イザベルはジョージの常識を嫌っ

¹⁸ 読書、読者の歴史についてはアルベルト・マンゲル著 原田範行訳『読書の歴史』(柏書房、1999年)を参照のこと。また、19世紀の女性読者については、ロジェ・シャルティエ/グリエルモ・カヴァッロ著 田村 毅他訳『読むことの歴史』(大修館書店、2000年)の11章に詳しい記載がある。

てはいたが、彼にはシャルルのような鈍さも、醜悪さもない。チボーデの言葉を借りると、シャルルの罪は「そこにいること」であるが、イザベルはジョージの存在自体に嫌悪感をつのらせてはいない。旧友のシギスモンド・スミスや、親代わりのレイモンドなどもイザベルが道を踏み外さないように、いつも気をかけ、理にかなったアドバイスをしている。また、ロドルフがエンマに対し肉欲的な愛を欲したのに対し、ローランドとイザベルの間に交わされるのは絵画や詩や文学の話で、ロドルフのそれとはまったく異なる。イザベルは無垢で純真、そして何も知らない子どもであるからこそ、ローランドは魅かれ、イザベルにその気がないことを知ると、遠ざかろうと努力さえる。なぜ、これらの違いが生じたのだろうか。

イザベルが生きたイギリスのヴィクトリア朝時代の社会には、リスペクタビリティ (respectability) という独特の価値判断の基準が存在した。それを軸にあらゆる規範が展開したとさえ言われる、注目すべき価値基準である。井野瀬久美恵はリスペクタビリティについて次のように述べている。「当時の人々、とりわけミドル・クラスはリスペクタブルであることに価値を置き、それゆえリスペクタビリティにかなうことーリスペクタビリティを実現することーが、彼らの実現すべての根源にあったのだ。」¹⁹

当時の価値基準、社会規範に従って「家庭の天使」の役割を与えられた中産階級の女性たちは、男性の安らげる場所作りや、家庭を守ることを第一の務めとしなくてはならなかった。リスペクタビリティという価値基準が深く浸透したイギリスでは、小説の中でさえも社会規範から外れた女性を描くことが難しかったと考えられる。しかし、家事を投げ出し、夫以外の男性と密会を重ねるイザベルは、女性たちのタブーを犯し、リスペクタビリティに反する危険人物である。ところが、物語が展開して行く中で、イザベルは先に述べた導き手たちの努力により、エンマのように一線を越えることがなかった。道を踏み外しかけたものの、良識ある男性たちのおかげで踏みとどまり、リスペクタビリティの枠組みに収まった形で物語は終結する。社会規範に沿い、リスペクタブルであり続けなくてはならない必要性、イザベルが「避難所」から出てエンマのように姦通を犯さない理由はここにあるだろう。

また、先にエンマもイザベルも貸本屋の熱心な顧客で、多くの本を借りて読み耽っていたことを述べた。エンマは修道院にいる間、貸本屋から借りた本を隠れて、むさぼるように本を読んだ。エンマのロマンティックなものに憧れる気質は、この修道院の小部屋で培われたものである。エンマは田舎の修道院の一室で、古城の騎士たち、悲劇に満ち溢れた女性たち、そしてイギリスの貴婦人に思いをはせた。

しかし、当時の人々は、読書が危険な要素をはらんでいることに気がついていて。例えばゾラの『テレーズラカン』では、テレーズがローランを操って夫を水死させた後、読書にふけるようになり、神経的な感受性があらたに生まれて、理由もないのに笑ったり涙を浮かべたりするよう

¹⁹ 井野瀬久美恵『イギリス文化史入門』、昭和堂、1994年。

になった様を描いている。なかでも、とりわけ若い女性の読書は倦厭された。虚構と現実の区別を忘れて夢想の中に生きて、とんでもない空想に浸ったり、現実生活を憂いて心のバランスを崩しかねないからである。フロベールも自身の『紋切型辞典』の中で結婚前の若い女性と読書の関係について次のように述べている。

「若い娘 - 青白く、華奢で純潔な存在であるから、あらゆる書物を禁じ、美術館、劇場、特に動物園の猿の檻に近づけてはならない」²⁰

一方、『医師の妻』の中で言及された作家や小説は一流のもので、エンマのようにロマンティックで感情をかきたてられるものだけではない。また、貸本屋から借りたイザベルの読み物には一定の制限が加わっていることが予想される。当時の貸本屋は、道徳的な観点から読者（特に女性読者）にとってリスペクタブルでないと判断した本を店頭に並べていなかった。父親や夫のかわりに、放火、殺人、重婚などが織り込まれた煽情小説をあらかじめ「検閲」することで、貸本屋のイメージは洗練されたものになり、リスペクタビリティを重んじる中産階級の人々の絶大な支持を得ていたからである。フランスにもある種の検閲は存在したが、イギリスほどには機能しておらず、また、国外で出版された海賊版も多く出回っていたことも影響し、比較的自由であったことがエンマの読書からもうかがえる。エンマはシャルルと寝室を別にし、淫猥、淫蕩な酒宴の場や、流血の惨を描いた途方もない本を、夜の白むまで読みふけていた。こうした類の本は、イギリスでは出回らないだろう。

ヴィクトリア朝小説が成立したころには、中産階級に代表される世論の力も加わって、文学にはある種の制限がなくてはならないという慣例が成り立っていた。したがって、この時期のイギリスの文学は、フランスやロシアに見られるような広範な題材、大胆な探究が欠けていると指摘したのはフレデリック・マイアットンである。チェスタートンは、その慣例にしたがって作家が小説を書いた結果、「表現上の問題に関して、俗物どもと妥協した結果、長い目で見た場合、文学を純化するどころか、逆に不純なものにし、このヴィクトリア朝の偽善的妥協は、有毒以外の何ものもたらさなかった」²¹と書いている。イザベルが、エンマのように姦通の罪を犯さなかったのは、こうした社会規範から外れることが許されなかったイギリスの強い価値基準があったからだと考えられるだろう。

エンマもイザベルも小説を読みふけて少女時代を過ごした。二人は小説の中で描かれるようなロマンティックな生活を結婚生活の中で具現化しようとするが失敗する。アッパークラス、ミドルクラスの女性たちは下位層の女性たちのように、労働に従事することも出来ず、「家庭の天使」

²⁰ フロベール著 小倉多孝誠訳『紋切型辞典』、岩波書店、2000年、p. 246。

²¹ G. K. チェスタートン著 安西徹雄訳『ヴィクトリア朝の英文学』、春秋社、1979年。

として良き妻を演ずるよう社会規範の中で位置付けられてしまっている。満たされない結婚生活に対し、幼稚なイザベルは、夢のような小説の世界である「避難所」から出ることをせず、エンマは読書をやめ、読書で養った想像を具現化しようと奔走する。この点が、エンマとイザベルの最も異なる点である。

もちろん、現実と虚構の区別を失い身を滅ぼしたエンマより、読書を現実逃避の「避難所」と位置付けて、つまらない日常生活を生き抜いたイザベルの方が分別のある大人の女ではないかという指摘もあろう。しかし、小説の中では、道を踏み外さないように導いてくれる男性たちが登場し、イザベルは良識ある男性たちに守られている。さらに、イザベルの読み物は、検閲により一定の規範内に収められている。男性たちの保護と検閲された本により、イザベルは主体性を持った個人としてではなく、当時の社会規範を体現するかのよう、受動的で、幼稚に描かれているのである。

いずれにせよ、この二つの小説は、女性の自己実現がいかに困難であったかを物語っている。中産階級以上の女性読者たちは、ヴィクトリア朝の家父長制やリスペクタビリティという社会規範の中で、道徳観念に縛られ、家庭の中に閉じ込められ、鬱積した感情を抱えていた。だからこそ、結婚生活に絶望し、夫以外の男性に胸をときめかせるイザベルを、同情をもって支持したのではないか。一方で『医師の妻』を読む中産階級の女性読者たちがリスペクタブルでありつづけるためにも、イザベルは幼稚で無垢なままでいなくてはならなかった。さらに、編集者としてのブラッドン自身の自己規制も働いていたことだろう。検閲を通過するためには、イザベルをエンマと同じように描くことは不可能である。逸脱しそうでいて、結局その枠組みから出られないイザベルの姿は、多くの女性読者たちの姿とリンクする。一方、エンマは導き手にも恵まれず、愛人にも捨てられ、借金を苦しんで服毒自殺をするにいたる。多額の遺産を受け取り余生を送るイザベルとは対照的だ。社会規範から外れたエンマは、社会から抹殺される対象であり、死を選択する以外なかったのかもしれない。

おわりに

本論文は『ボヴァリー夫人』と『医師の妻』を比較することで、『ボヴァリー夫人』の新たな読みを展開することを目的としている。そこで、第1章と第2章でエンマとイザベルの閉鎖的空間のイメージの違い、読書の役割の違いを見てきた。エンマの閉鎖的空間は想像力と結びつき、意思の力によって外界との接触を求め、悲劇的な結果へと導かれていく。その際、読書は想像力を培うための道具であり、エンマの夢を実現するための台本であるとも言えるだろう。一方、イザベルの閉鎖的空間は秘密と結びつき、外界との接触を拒み、内側へと作用する。その際、読書はイザベルの避難所となる。満たされない現実から目をそむけ、夢の世界に没頭できる避難所は、社会規範からの逸脱を阻止するための「柵」の役割も合わせ持っているといえるだろう。また、

第3章で示したとおり、当時の女性たちの読書を、社会背景と切り離して考えることは出来ない。貸本屋には、検閲により、リスペクタビリティという社会規範から外れないことが約束された本が並んでいた。ウォルター・アレンは、「読者」という視点を持ってヴィクトリア朝の小説を分析し「小説家たちは、彼らの時代の矛盾に気がついていた。彼らはその時代の仮説を読者と十分共有していたので、読者の疑いや不安を言葉に表し世に送り出したのだ」²²と言う。つまり、貸本屋の大多数を占める中産階級の女性読者たちの共感を得るため、ブラッドンはイザベルに少しだけ道を外れさせ、結果的にはリスペクタビリティという社会規範に沿うため「避難所」から出さなかったのである。そこには自身の編集者としての自己規制と、大衆小説作家として、女性読者たちを意識して執筆したブラッドンの意図が見える。『医師の妻』と『ボヴァリー夫人』の結末の違いは、閉鎖的空間のイメージの相違、読書の役割、社会規範、女性読者などが複合的に作用した結果である。

一方、フランスにも同様の社会規範が根強く存在していた。たとえ革命の前線に女性がいたとしても、サロンの女主人たちが一定の発言力と権力を持っていたとしても、フランスの中産階級の女性たちの閉塞感は、イギリスの女性たちのそれと変わらない。エンマはその枠組みから自分の意思で抜け出し、悲劇的な死を遂げた。フロベールは、社会道徳から逸脱した女のなれの果てをエンマに託して書き上げたのだろうか。フランスの女性読者たちは、エンマの壮絶な死をどのように受け取ったのか。フロベールは言う。「今、このとき、フランスの多くの村々でボヴァリー夫人は泣いている」²³ 地方風俗と副題のついたこの小説は、社会規範にとらわれ自己解放を求めることがタブーとされた女性たち、特に地方の中産階級の女性の鬱積した感情の表れである。フロベールは、社会通念に反し、自分の思うように生きることが困難な女性たちの姿を、服毒自殺の末に苦しみぬいて死にいたったエンマの姿に重ね、彼自身が忌み嫌った俗物的なブルジョアの勝利という結末をもってイロニックに描き出したのである。芸術至上主義を自ら公言し、7年もの歳月をかけて、孤独と向き合いながら書き上げた『ボヴァリー夫人』はフロベールの傑作である。フロベールはエンマの苦悩や悲しみの中に、自分自身と、多くの女性たちが心の奥に隠しておいた本当の感情と姿を投影させたのである。

フロベールは、ブラッドンのように作品を社会規範の枠内に納めることも、読者たちを意識した執筆も行わなかった。その結果、出版されるやフランスにセンセーションを巻き起こし、良俗を犯すものとして裁判になった。しかし、ブルジョア社会における現実の直視と実証主義による緻密な分析のもとに描き出された『ボヴァリー夫人』の中に、苦悩と悲しみに満ちた女性たちが、確かに息づいている。本論文を通して『ボヴァリー夫人』がフランス19世紀を代表する小説で

²² ウォルター・アレン著 和知誠之助共訳『イギリスの小説 上』、1975年、P. 96。

²³ フローベール著 蓮実重彦他訳『フローベール全集7』、筑摩書房、1967年。

1853年8月14日、ルイズ・コレ宛ての書簡でフロベールが書いた。「地方風俗」という『ボヴァリー夫人』の副題についての見解を表したものである。

あるだけでなく、『ボヴァリー夫人』というリアリズム文学を通して、私たちが、生きた社会史に触れることが出来ることを証明できたのではないだろうか。

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、2008年10月16日付)。